

“農と食” 北の大地から

連載第18回

足寄町から発信する 「放牧酪農」の確かな営み

酪農の原点を見つめ放牧に挑戦 新規就農の学校開設や「宣言」へ



ルポライター
滝川 康治

化学肥料を撒かず牛たちに土・草づくりをやらせてもらう、吉川友二・千枝さん夫婦の「ありがとう牧場」の夏(写真右)。放牧研究会の学習会は夫婦そろって参加が原則で、和やかな雰囲気、経営や生活を語り合う(左下)。昨年11月、上野登地区の会館で

■ “農と食” 北の大地から ⑩

家族で行こう会。すでに半数以上の会員が行って来た、という。
いまから九年前に同国を訪れ、牧草地を適当な広さに区分けして電気柵で囲って牛を放し、順に牧区を変えていく「集約放牧」によって低コスト酪農をやっている姿に共感した佐藤会長(1949年生まれ)は、

「(一定の面積に収容可能なギリギリの数の牛を入れて最大の効率を上げて、儲けることが(NZ酪農の)主眼になっている。今後は、オーガニックミルク(有機牛乳)のこともあるので、ヨーロッパの堅実な農家を訪ねる必要があるんじゃないか」と会員たちにアドバイスする。
美しい金髪女性が平然と雄牛の精液採取の様子を説明したうえ、カメラを

北海道の酪農地帯の牧草地から牛の姿がめっきり減って久しい。そんななか、十勝管内足寄町の酪農家たちが八年前に研究会をつくり、放牧型の酪農経営に転換。活動の輪は広がり、放牧グループが増え、新規就農を志す人たちの「放牧学校」の開設準備も進んでいる。酪農の原点を見つめ直す人たちや「放牧牛乳」の良さをリポートする。

夫婦そろって参加し NZ訪問も実現する

日本で一番広い行政面積をもつ十勝管内足寄町。かつて戦後開拓の苦闘の舞台になった山麓の傾斜地を中心に酪農地帯が広がり、百二十戸ほどが一万頭あまりの乳牛を飼養している。
昨年十一月中旬、足寄町放牧酪農研究会(佐藤智好会長・8戸)の学習会には、夫婦で参加した酪農家や新規就農を志す若者ら二十人ほどが集まった。話題の中心は、ニュージーランド(NZ)から帰国した一組の夫婦と農協職員による、酪農視察の報告である。
「訪問してとても良かったので、みんなにも行ってもらいたいね」
「農家の生の声が聞けなかったのが残念だ。畑の土をほじってみてもミミズはいなかった。(牛が食べる)草の総量が少ないんじゃないかな」
「(NZは)土地からカネを儲けよう、という感覚が強い。牛のウンコを入れて循環型で酪農をやろうとしている」
「いや、糞は、ペタバタとあるだけだった。うちの放牧地なら、牛のいるところは糞だらけだよ」
町並みの美しさに魅了された女性たち、男性陣からは自分の経営や草づくりに対比させたシビアな発言が次々と。研究会の別名は「ニュージーランドに



向けるとポーズまで取ってくれた——という話には、爆笑がわき起こる。近く新規就農する一組の若い夫婦が近況を報告するなど、和やかな雰囲気ですり合う姿に、この町で放牧酪農を進める人たちの心意気を感じとれた。

「高泌乳」高所得」に こだわらず放牧に転換

三十年ほど前まで道内どこでも見ら

れた乳牛の放牧風景は、飼養数の拡大と一頭あたりの生産乳量を増やす経営が主流になるにつれて、目にするのがめっきり減った。その結果、「一八一年当時には四割近い放牧による草地の利用が、九七年にはわずか一割以下へと大きく低下」北海道酪農畜産協会の須藤純一さんだ。

自給飼料を生産できる広大な草地があり、牧歌的な農村風景で北海道を売りにこんできたにもかかわらず、多くの

乳牛は狭い牛舎のなかでアメリカ産の穀物を大量に食べさせられ、牛乳製造装置として酷使される——という、いびつな生産構造がある。ここ数年、放牧が見直されてはいるが、たとえばわたしが暮らす道北の下川町では、酪農家四十戸ほどのうち、本格的な放牧を行なうのは、わずか一戸にすぎない。足寄町では、戦前の軍馬飼育地帯を解放して開拓農家が大量に入植し、雑穀などの栽培をへて、六〇年代初めから気候条件に左右されにくい酪農が導入された。国の構造改善事業などを導入してサイロや大型機械の整備がな



高泌乳経営に行き詰まりを感じて放牧に転換した会長の佐藤智好さん

れた七〇年代半ばには、施設型の酪農への転換が進んできた、という。開拓一世代目の佐藤会長もまた、規模拡大を見越して七〇年代に町西部の芽登地区に移転した。倉飼いで穀物を多給し、一頭当たり乳量一万キログラムもの高泌乳経営をめざしたが、牛本来の生理に反した飼ひ方なので繁殖障害や病気の発生に悩まされた。「高泌乳＝高所得」は実現できず、将来の経営に希望を持てないでいた。そんななか、放牧酪農で成果を上げている浜頓別町の池田邦雄さんの牧場や、ニュージーランドを視察して、自

然に逆らわない循環型酪農への挑戦を決意する。そして九六年、性格や経営状況の違う人たちに声をかけて、四十年代半ばの七戸で研究会を設立した。当初から「夫婦そろっての参加を目標に掲げてきたのが会の特色である。」

開けっ広げに議論し 3年ほどで経営好転

現在の会員は、会長の佐藤智好さん、副会長の黒田正義、節子さん、会計の本間正喜、あつきさん、柴田哲夫、静枝さん、本間隆、恵美子さん、村山昭雄、裕子さん、佐藤敏明、二三さん、新規就農者の吉川友二、千枝さんの八夫婦。いずれも足寄町開拓農協の組合員で、三十一百ヘクタールの草地に三十一百頭ほどの乳牛を飼う人たちだ。会員宅でのフィールド研修や国内外の視察、学習会などの活動を積み重ねる一方、昨年八月には全国から二百人あまりが参加して盛会だった「放牧酪農ネットワーク交流会」を足寄で開催する原動力になった。「最初のうちは集まっても暗い話が多く、負債残高ひとつにしても数百万円

から六千万円まで差があった。でも、各メンバーの経営内容を開けっ広げにして、みんな「厳しい経営をどうしようか」と論じあえた。「働き方が悪い」「牛にエサを食わせすぎている」とか、ずいぶんディスカッションしましたよ。人との交流ができて、初めて自分たちが良い方向に進んでいるかどうか分かってきたんです」

佐藤会長は七年間をこう振り返る。会員たちが自信をもつようになったのは、発足から三年ほどで経営内容が好転したことが大きい。昼夜放牧することで飼料代が減り、健康を取り戻した牛たちは乳房炎などの病気が減って耐用年数も延びた。牛舎での給餌や糞尿処理などが楽になった。牛が「歩く草刈り機」をやってくれるので、作業時間が短くなって生活にゆとりができた。牛が放牧地に排泄する糞尿は土を肥やしてくれる……。

その結果、乳量が多少減っても、飼料代などの支出額が少なくなつて経営が安定し、負債の償還財源が生みだされていった。農業の世界は、立派な理論を振りかざしても、経営が良くないと評価されない。経営の好転は会員た

ちの自信と矜持につながり、町内外から注目されるようになった。いまでは、足寄といえは「放牧酪農」を抜きに語れないほどだ。

事務局の坂本秀文さん(足寄開拓農協職員、一九四八年生まれ)は、

「会員たちは最初、しゃべりは下手で、ここまでやれるとは思わなかった。いまでは、借金の額まで分かりあい、互いにアドバイスする空気がある。こちらから知らせてもいないのに、学生や「百姓をやりたい」と言う若者が寄ってくる。研究会ができて、新規就農の希

望者がどっと増え、農協にくる問い合わせをさばききれない」

と、予想外の反響に笑顔をみせる。研究会の発足当初から積極的に関わってきた町農林課の桜井光雄(農政係長、一九五六年生まれ)は、

「メンバーの年代は経営方向を変える最後のチャンスで一つの賭け、当時としては勇氣のある手法でした。『もう後戻りできない。失敗しても自分の責任だ』と言って真剣にやっている。足寄農業が生き残るには「農協に頼らない」に軸足をおく——その基になるのは放牧酪農。役場や農協が放牧推進の音頭をとつたらダメです。具体的な経営実績が出てきて放牧が広がると、役場や農協がネットワークづくりに協力する態勢にしています」

と、行政側の支援姿勢を説明する。坂本、桜井さんの熱心な協力が研究会を支えた面も大きいようだ。

放牧で土を良くして ゆとりの生活めざす

足寄町市街地から車で十分ほどの山間の傾斜地に、二〇〇〇年に新規就農

した会員の吉川さん夫婦が営む「ありがとう牧場」が広がる。大がかりな牛舎はなく、牧草の生育時期に牛乳生産がピークになるよう三、四月に集中分娩させるなど徹底したやり方を試みており、地域に新風を吹き込んでいる。「うちの目標は、放牧した牛に堆肥をたくさん撒いてもらうこと。最近、や」と糞の下に「ミミズが湧くようになった。放牧で土が良くなり、トータルで食っていけるならば、目に見えない利益があるんじゃないか。僕は、牛と草と土の神秘の世界を信じていますよ」

九〇年代にニュージーランドで働いた経験がある吉川友二さん(一九六四年生まれ)は、こう言つて土・草・牛が循環する酪農の実現に意欲をみせる。

長野県生まれの吉川さんは、子どものころに田舎暮らしを夢見て育ち、北大に進んでからは「自然保護のような仕事ができれば……」と考えていた。卒業後は、自給自足の暮らしをめざして道内各地の有機栽培農家などを訪ね歩き、出稼ぎ生活も経験した。

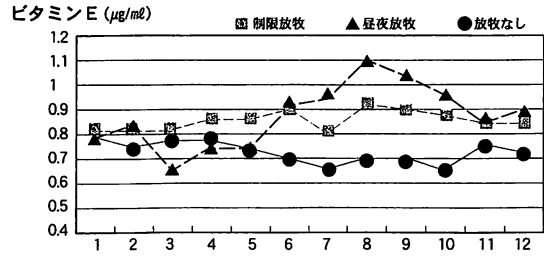
旭川市内の山間部で「牛が耕す牧場」を営む齊藤晶さんの著作を読んだのが放牧酪農との出会いだった。「穀物を

与えずにやる方法があるんだな」と思いい、九三年には齊藤牧場で働いてみた。その後、友人宅でニュージーランド酪農を紹介した本を見つけ、配合飼料を与えない酪農を知り、「やるならこれだ!」と直感。著者の一人に手紙を書き、同国に渡つたという。

ニュージーランドでは二十歳の若者が二百頭の牛の飼養を任されていた。「その青年との出会いが四年間いた原動力。若者たちは農場主になる夢をもち活気があつた」と語る吉川さん自身も、四年目には百六十頭規模の牧場を



ニュージーランド方式に学び循環型の酪農を試みる新規就農の吉川さん



「放牧」と「放牧なし」の生乳に含まれるビタミンEの違い (道農政部の事例集より)

間は牛のそばを離れない長時間労働の介護酪農と負債の山、牛は病気にかかりやすく短命になった。それでも放牧への転換がなかなか進まない最大の要因は、輸入穀物を混ぜた配合飼料が安く入手できたからだ。が、もともと人間が食べられる穀物を輸入して家畜に与え、排泄された糞尿が環境汚染を引き起こすような酪農・畜産のあり方に未来はない。飼料の自給率向上に貢献し、牛も人も健康になれる。環境保全にもつながる——冷静に考えれば、それだけでも放牧の優位性は明らかだ。

放牧酪農は牛乳や乳製品の消費者にも恵みを与えてくれる。道立根拠農業試験場は九六年七月から一年あまり、釧路管内浜中町で「昼夜放牧」「制限放牧」「放牧なし」合わせて十七農場を選び、それぞれの生乳を採取して栄養成分を測定した。その結果、動脈硬化を防ぐ役割などがあるビタミンEや、β-カロチンの含量は、舎飼よりも放牧農家の生乳のほうが高いことが明らかになっている。夏場の成分差が大。別項のグラフを参照。「若いチモシー(ネコ牧草)の生草にはビタミンEやカロチンが特段多く、多食させると生乳中に出てくる。放牧草だとさらに高くなる(同試験場の高橋雅信乳質生理科長からだという。農水省が所管する研究機関の実験結果によると、放牧草や乾草など粗飼料を多く与えるほど、O-157をはじめとする有害大腸菌の腸内での増殖が抑えられることも分かっている(02年10月8日付け「日本農業新聞」)。

さらに、近年とみに注目を集めている「吉川さん」が、化学肥料は使わない。その代わり、放牧地に堆肥を年に三回散布したり、急傾斜地には乾草やサイレイジ(糞酵飼料)を運んで牛に糞尿をさせさせる...と、根気よく土を良くする仕事に取りくむ。酪農経験のあるわたしは、そんな話を聞くと「偉いなあ」と感心してしまう。

配合飼料の給与量も、夏場は一日二キロ、最多でも五キロと、一般の酪農家の数分の一。素性の明らかな道産・国産穀物を与えるなど工夫を重ねていくと、飼料の自給や有機酪農を実現させることも難しくないだろう。

六千万円あまりの負債があるが、「化学肥料を使わずに踏ん張り、人も牛も無理せず、借金を返せるようにしたい」と淡々と話す。「ありがたい牧場」で研修してから町内で新規就農する人も現れており、吉川さんの実践は大きな刺激を与えているようだ。

健康になれる。環境保全にもつながる——冷静に考えれば、それだけでも放牧の優位性は明らかだ。放牧酪農は牛乳や乳製品の消費者にも恵みを与えてくれる。道立根拠農業試験場は九六年七月から一年あまり、釧路管内浜中町で「昼夜放牧」「制限放牧」「放牧なし」合わせて十七農場を選び、それぞれの生乳を採取して栄養成分を測定した。その結果、動脈硬化を防ぐ役割などがあるビタミンEや、β-カロチンの含量は、舎飼よりも放牧農家の生乳のほうが高いことが明らかになっている。夏場の成分差が大。別項のグラフを参照。「若いチモシー(ネコ牧草)の生草にはビタミンEやカロチンが特段多く、多食させると生乳中に出てくる。放牧草だとさらに高くなる(同試験場の高橋雅信乳質生理科長からだという。農水省が所管する研究機関の実験結果によると、放牧草や乾草など粗飼料を多く与えるほど、O-157をはじめとする有害大腸菌の腸内での増殖が抑えられることも分かっている(02年10月8日付け「日本農業新聞」)。

わたしの生家は十数年前に廃業するまで放牧をやっていたので、その長所はよく分かる。いざれやってくる食料



全国から200人あまりが参加した「放牧酪農ネットワーク交流会in足寄」のシンポジウム(昨年8月)

「放牧酪農ネットワーク交流会in足寄」のシンポジウム(昨年8月)で、北海道に於ける放牧酪農の現状について、足寄町放牧酪農研究会の取り組む「放牧酪農ネットワーク」の取り組みが紹介された。

八十六ヘクタールの土地(うち放牧用は50ヘクタール)で三十七頭の成牛と育成牛約三十頭を飼うが、季節分娩なので一二月は搾乳作業がなく、時間的なゆとりがある。土づくりもこだわっている。「春先に草の伸びが悪いと喉から手が出るほどほしいな

九九年には新たに開拓農協組合員の五戸が山麓放牧の会(南雲和行会長)を結成し、足寄農協の組合員五戸も独自に第三のグループを立ち上げた。

吉川さんのような放牧志向の新規就農希望者も増えている。といつても、「技術や資金などで新規就農者のフォローアップには七年かかり、年間二〜三戸を入れるのが限界(町農林課なので、事はそう簡単ではない)。

そこで足寄町は、芽登地区の廃校を利用して、宿泊施設を備えた放牧学校を開設する準備を進めている。新規就農を志す人や農業関係の学生、府県出身の若者が対象。単身者は学校に宿泊、既婚者は公営住宅などで生活しながら、放牧酪農に取りくむ農家へ研修に通って学ぶ...という計画で、校長は道内の先駆者に依頼する予定。いまは事前調査の段階だが、近い将来放牧酪農の拠点が生ずる。

ここで学んだ人たちが全道各地に散って放牧酪農に取りくめば、新たな発想で農業の原点に返ることができるようになる。明日への希望が持てる「放牧学校」が誕生するときに楽しみだ。

町内には第三セクターのチーズ工場

「エーデルケイセ館があるが、ここで放牧牛の生乳からチーズや飲用乳を製造する計画も練っている。「放牧牛の生乳には抗酸化機能のあるラクトフェリンが含まれている。いままでも子どもの飲み物と見られがちですが、今後は老人ホームや病院などで使う「お年寄りにやさしい牛乳」のイメージを持つてもらえるのではないかと。『きょうは○○さんの牛乳です』という形で販売すべく工場側と相談しています(前出の桜井農政係長)。

阿久津勝彦町長(二期目)は放牧酪農の推進を掲げて当選しており、町として「推進」を宣言する構想がある。町内の二農協などに「技術と人材の両面で足寄を放牧酪農 北海道の発信地にしよう」と提案中だ。七戸の農家が先鞭をつけた試みに自治体も応え、地域の自立を模索する動きは頼もしい。

新規就農の放牧学校や牛乳の加工構想も

研究会の発足から八年、足寄町の放牧酪農は静かな広がりを見せている。

共役リノール酸などを多く含む放牧牛乳

「舎飼いするほうが楽に栄養を管理できて、生乳の生産量を増やせる」といった理由で放牧が敬遠された結果、人